

北九州市環境科学研究所報

第 41 号

(平成25年度)

北九州市環境科学研究所



北九州市民憲章

わたしたちのまち北九州市は、美しい自然に恵まれ、
ながい歴史とたくましい産業をうけついできました。

わたしたち北九州市民は、このまちを愛し、よりいっ
そうの市民参加によるまちづくりをめざしています。

このふるさとに、実りある未来を築くため、わたした
ちは、みんなで守る約束を定めます。

緑を豊かに 清潔で美しいまちにします

きまりを守り 安全なまちにします

人を大切にし ふれあいの輪をひろげます

元気で働き 明るい家庭をつくれます

学ぶ楽しさを深め 文化のかおるまちにします

はじめに

環境科学研究所報第41号の発刊に際しまして、ご挨拶を申し上げます。

当所は、設立以来、周囲を取り巻く保健衛生や環境問題の状況の変遷と共に、大きな変貌を遂げてまいりました。

昭和40年に衛生研究所として小倉北区井掘の朝日が丘病院内に設立され、法定伝染病や食中毒の検査などを行ってきましたが、公害の激化に伴い、昭和49年に環境衛生研究所に名称変更し組織を拡大し、従来業務に加え、大気・水質環境の改善を目的として様々な環境分析や調査研究を行ってまいりました。

公害が終焉し、平成6年に現在の環境科学研究所として名称変更した後も、微量化学物質汚染への積極的な対応、水の総合的な研究開発機関であったアクア研究センターの設置、環境ミュージアムの礎となった学習情報系の創設など、時代のニーズに合った業務に積極的に取り組んできました。

この間、日本経済が飛躍的に発展するにつれ、グローバル化の流れは進み、海外との交流が益々増加するようになりました。そのため、私たちは従来とは異なったりスクに直面するようになっていきます。パンデミックの懸念がある鳥インフルエンザ、本年夏の東京代々木公園地域で起きたデング熱の集団感染、西アフリカ地域のエボラ出血熱の感染拡大など、以前では想像もできなかった感染症への備えが必要な時代にはなっています。

食品衛生の分野でも海外の農産物など輸入食品が増加していることから、食の安全性を担保するために、食品添加物や残留農薬の検査の重要性が年々、増しているところです。環境の分野でも公害のように地域の工場や自動車が環境汚染の主たる原因であった時代から、黄砂やPM2.5など国境を越えて飛来する物質による健康影響が懸念されるようになりました。

本研究所ではこういった問題へ対処するために、最新の分析技術や分析装置を備えると共に専門的な知識や技術をもった人材の育成を進め、市民の安全な生活の確保を目指し、今後も、精度の高い検査データを迅速に提供、調査・研究にも積極的に取り組んでまいりたいと考えています。

小誌は平成25年度の当所の業務概要と調査研究結果をまとめたものです。皆様に広く活用され、当所の取組に一層のご理解、ご協力を賜れば幸いです。

平成26年12月

北九州市環境科学研究所
所長 山下 俊郎

目 次

第1	沿革・組織及び概要	
1	沿 革	1
2	組 織	1
3	検査件数	2
4	予算概要	3
5	分析機器整備状況	4
6	庁舎配置図	5
第2	業務内容	
1	試験検査等	
	環境部門	6
	衛生化学部門	9
	微生物部門	15
	その他	20
2	調査研究	22
第3	講演発表・報告書	
	(講演発表)	
	・北九州市洞海湾における水質改善と付着動物組成の変化	23
	・走査型電子顕微鏡の粒子解析機能を用いた大気中粒子状物質の 粒径分布と元素成分の分析	25
	・北九州市における微小粒子状物質(PM2.5)の無機元素成分 の測定について(Ⅱ)	26
	・北九州市洞海湾における付着動物調査からみた水質改善について	28
	・廃材置場における火災時の大気環境について	30
	・走査型電子顕微鏡で見る北九州市内の大気中粉じんの特徴について	32
	・食品中の残留農薬試験法の改善と妥当性評価	36

・ ATP法およびLAMP法を用いた浴槽水レジオネラ属菌の
簡易迅速スクリーニング法の検討 38

・ トッピングにも気をつけて(海苔でもおこる食中毒) 41

(報告書)

・ 食品中残留農薬に関する一日摂取量実態調査 43